

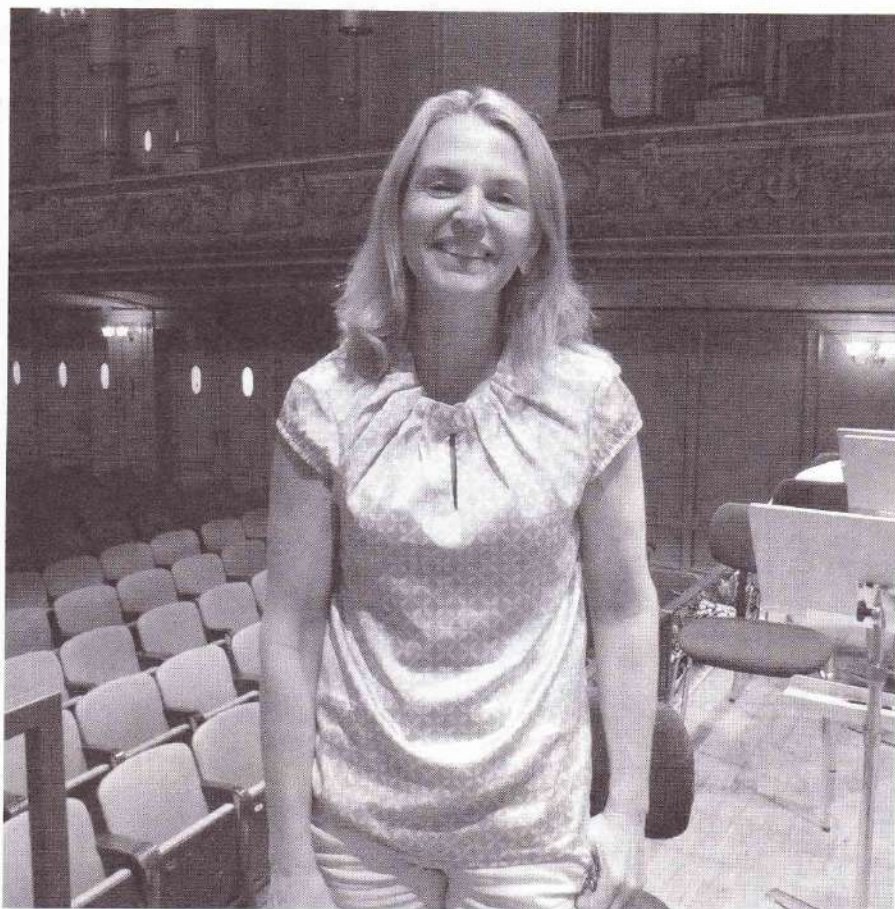
デイヴィッド・ジンマン との19年間

——今回のモーツァルトの協奏曲はいかがですか。

「仲間の前にソリストとして登場するのは久しぶりなので、ナーヴァスになっていましたが、プローベがうまくいったので、やっと明日のコンサートが楽しみにになりました。私はコンサートマスター以外ではダメという気がしますが、今日のように、最初からソリストの顔をして登場してみると、オーケストラの中で皆と混じって弾いておきながら、いきなりソロ・パートを弾く方がずっと難しいという、コンサートマスター唯一の難点を再認識します」

22年前のある晴れた日、チューリヒにオーデイションに来て、「この街に住んで、このオーケストラのコンサートマスターになれたら、なんて幸せだろう」と、晴れやかな気分でヴァイオリンが弾けた

チューリヒ・トーンハレ管弦楽団は、これから大きな転機を迎える。一つは、ホール全体が楽器のように共鳴する音響の良さと知られるトーンハレが3年間の工事に入ること、二つ目は、2019/20年のシーズンからパーヴォ・ヤルヴィを新音楽監督に迎えることだ。トーンハレ管の3人のコンサートマスターのうち、一番古株のユリア・ベッカーを、モーツァルト「ヴァイオリン協奏曲第3番」にソリストとして臨むプローベ（練習）の後に訪ねた。



歴史あるトーンハレ管初の女性コンサートマスターとなった。トーンハレ管では恵まれた環境だとのこと。13歳でオーケストラに入ってから常にコンサートマスターだった

という。そして無事採用された勤務初日が、偶然、デイヴィッド・ジンマンが音楽監督としての初日でもあった。数年前の取材時のプローベでも、ジンマンが彼女に寄せる信頼感が明白に見て取れた。

「入団当時は、私の室内楽の先生でもあったプリモ・シユ・ノヴシヤックがコンサートマスターとして君臨していたのですが、ジンマンは初日から私の力を認め、敬意を表してくれました。彼との19年間でこのオーケストラは、以前とは比べものにならないレベルに到達しました。もし15年間で彼が去っていたら、短かすぎると思っただけですが、任期の最後の方は彼の健康状態も万全ではなく、ちょうど良い時期に交代となったため、今でも彼がゲストで振りに来てくれると、仕事を満喫できる関係です。

今回ヤルヴィが音楽監督に選出された会議では、私の後輩のコンサートマスターと音楽器の代表、運営側の代表二人の計4人が臨席しました。現音楽監督をリオネル・ブランギエに決定した時は、全団員の投票だったのですが、多数決よりも代表者会議での議論の方が、最適な決定を下せると思います。ヤルヴィは16年12月に共演したシューマンが素晴らし

連載

世界のコンサートマスターに聞く
Interview with Concertmaster in the world

第30回

ユリア・ベッカー

(チューリヒ・トーンハレ管弦楽団第一コンサートマスター)

Julia Becker - 1st concertmaster of Tonhalle Orchestra Zürich

取材・文・写真＝中東生 Shinobu Naka

く、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団とのベートーヴェン録音で賞も取っているの、共に歩む道がとても楽しみです」

トーンハレ管初の女性コンサートマスター

トーンハレ管はどのようなオーケストラだろうか。

「楽団員魂が素晴らしい。当時また非常に若かった女性の私が入って来ても、誰一人として、敬意を欠くような態度を取った団員はおらず、何の障害もなく、コンサートマスターの権限を持たせてくれました。知り合いのコンサートマスター

たちからは、男性でも、「背後からナイフが刺さるほどの殺意を感じる」と表現される敵意を感じる事が多いそうなので、本当に恵まれた環境だと思います。また、スイス人が一番多いのは当然として、一番大きな外国人グループは私と同じドイツ人ですし(笑)、20以上の国籍が集まる国際的なオーケストラなので、やりやすいです。楽団としてのシステムも効率的で、ポウインング付けなどの仕事も、楽譜係が前もってスケジュールを立ててくれるため、1年ほど前には自分が乗り番の曲目が決まり、楽譜をもらっているので、余裕を持って仕事をこなせます」

「父がケルンWDR交響楽団のヴァイオリン奏者なので、私もオーケストラが好きになり、6歳でヴァイオリンを始めました。練習嫌いで頑固者だった私を、父



「単身赴任者」であるベッカーは、家族のいるドイツ・ミュンヘンと職場のあるスイス・チューリヒを行き来する

ユリア・ベッカー (Yuria Becker)

1968年、ドイツのベルギッシュ・グラードバッハ生まれ。父親に6歳からヴァイオリンの手ほどきを受けた後、ケルン音楽大学でイゴール・オズィムに師事。1990年ハンブルクのブラームスコンクールで「ベストダブルコンサート」特別賞受賞。フライブルク音楽大学でライナー・クスマウルの元、1993年にオーケストラ・ディプロム取得。ダルムシュタット市立劇場第1コンサートマスターに抜擢され、1995年まで務めた後、同年8月からチューリヒ・トーンハレ管のコンサートマスターに就任、現在に至る。1996年からバイロイト祝祭管弦楽団メンバー。2003年からチューリヒ音楽大学ウィントラートウールキャンパスにてノーラ・チャステインの元で再び勉強し直し、2005年にコンサート・ディプロムを取得。

大変気に入っています(笑)と自然体だ。コンサートマスターを務めながらチューリヒの音楽大学に

が肩車しながら練習させてくれたりしたおかげで、13歳で国立ユースオーケストラに入った時から、常にコンサートマスターでした。チューリヒに来る前、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスター試験を僅かの差で落ちた時、「天下のベルリン・フィルだから、ト

ジンマンとの19年間で以前とは比べものにならないレヴェルに到達しました

ッティのオーディションを受けようかな」と思ったけれど、受けなくて良かったです」と振り返るベッカーは、実はトーンハレ管初の女性コンサートマスター

なのだが、肩肘張ったところがない。「街中で、さすがに声はかけられることはありませんが、『あの金髪のコンサートマスターだ』という視線を感じるこの環境が

を持つ母親でもある。

「ありがたいことに、コンサートマスターは勤務日数が一番短いので、1年の3割はチューリヒで仕事に励み、残りの7割はドイツで生活しています。子供たちは幼稚園に上がる歳までチューリヒで育て、就学とともにドイツへ返してきました。最後の息子が5歳半までチューリヒにい

たのですが、また独りになってしまいました」と寂しがりながらも、生き生きとして、家庭と仕事を遠距離で両立している。コンサートマスターを務めながら、チューリヒの音楽大学(現チューリヒ芸術大学)に2年間通い、ソリスト・ディプロムを取ったのだ。17、18歳の学生たちに混じって学内演奏会で弾く時ほど緊張したことはなく、今までない体験だったと回想する。

「みな、トーンハレのコンサートマスターがどう弾くか、1音の乱れも聴き逃さない、と耳を傾けているのです(笑)」

オーケストラ・ディプロムのみでコンサートマスターとしてのキャリアが始まったので、ソリスト・ディプロムを取って、家族の側にいられる(ミュンヘンの)オーケストラのコンサートマスターを受け直すための決断だった。

「自分も3人兄弟なので、子供は3人欲しかったのですが、夫から「3人目はミュンヘンに戻れたらね」と言われたので奮起しました。結果的にはバイエルン州立歌劇場管弦楽団のコンサートマスターの座も、また僅かの差で逃したけれど、その間に3人目を自然に授かりました(笑)」

俊英ながら力みがなく、オーケストラに誇りを持ちながら、楽しそうにコンサートマスターを務めるベッカー率いるトーンハレ管弦楽団が、街外れの仮ホールを拠点に、そしてパーヴォ・ヤルヴィの棒によってどう発展していくのか、これからが楽しみだ。